県民の皆様から寄せられた御意見（概要）

本計画の策定に当たっては、４２の地域集会、７か所のタウンミーティング、１０か所のミニタウンミーティング、さらに２回の意見募集等を通じて、県民の皆様から数多くの御意見をいただきました。

その中から、同じ趣旨のものが多かった御意見や、策定作業部会で検討された御意見などを、それぞれの課題ごとに紹介します。

目標１　みんながその人らしく生きることができ、みんなで誰をも尊重し合い、自立をはぐくむ社会を目指します

（基本的な課題１）みんなの人権の尊重と侵害の解消

○ドメスティック・バイオレンスなど、女性の人権の尊重と侵害の解消を実現してほしい。

○高校生の娘がいるが、友人から「付き合っている男の子に脅される（殴られる）ので、怖くて別れられない」と相談されている。女の子は自分が嫌われるのもいやなので、男の子がかさにかかって言ってくる。「これが正しい権利だ」と小さいときから分かっていれば、女が臆することも、男の横暴もないのではないか。

○私の受けていることは DV だと思うが、行動はしていない。言葉の暴力を DV としてきちんと位置付けてほしい。社会の認識が進めば、口にして変われる。

○会社に入った頃、飲み会で「お酌をしろ」「偉い人の両隣には女性が座れ」と言われた。うまくできないと「お酌の仕方も知らないのか」と。同期の男性はやれとは言われない。仕事の延長とはいえ、仕事とは関係ない。

○職場でセクハラの被害に遭った。上司に相談したところ、「それくらいのことは我慢しろ」とか「他言するな」と口止めされた。法律はできたけれど…と毎日がむなしい。

○男女共同参画にしても男女平等にしても、それ自体が一人歩きをする危険性を常にはらんでいる。あくまで、個人の尊厳、基本的人権の尊重といったところに原点があり、その尊厳や人権を、性別に関係なくすべての人に保障する考えである。これは当然のことだが、あえて強調しておかないと、故意に歪曲して悪意で宣伝しようとすることになりかねない。

○TV等のメディアは問題意識が薄い。性差を利用、違いを強調。いくら学校で教育しても、TV 等の影響が大きいので、メディアの根底を変える必要がある。

○男性だから、女性だからではなく、人としてのという視点を強調しないと、男性が聞く耳をもたないことに通じると考える。

（基本的な課題２）教育の場における男女平等に関する教育・学習の促進

○子どもの教育においては、男女共同参画が少しずつ進んできている。PTA活動や学校行事にも、父親と母親がともに参加することが多くなってきた。男女共同で子育てや教育にかかわることで、子どもにもよい影響を与えることができると思う。

○教育現場において、生徒は性別を意識することなく生活できるようになっている。生徒会長が女性でも何ら抵抗感がない。

○家庭科の学習を通じて男女の自立を促すことが、男女共同参画社会づくりを進めることに結びついていく。

○混合名簿への転換は、子どもにとって抵抗なく定着している。常に男性が先であるという刷込みは、子どもの意識の根底に根付いてしまう。

○混合名簿はややこしい。友達をさがすときに不便。

○兄は大学に進学したのに、私は父親に「女性に学問はいらない」と言われ、花嫁修業を強いられた。

○これからは、いかに自分の人生を主体的に生きるかということが大切である。自分がどういう人間かを知り、自分がやりたい職業に就くことができるような教育をしてほしい。

○伝統的な呼び方である「くん」「ちゃん」付けがなぜいけないのか、きちんと理由付けして説明できるようにしたい。

○パンフレットの配布や学習会等の開催により、多くの人に男女共同参画社会づくりの意図が明確になるようにしたい。

○男女共同参画の考えを押し付けたり、こうあるべきだとあまり表現したりせず、自ら気づき理解してもらえるような啓発をしたい。

○いろいろな講座や講演に参加してみると、男性の参加者がとても少ない。男性が興味を持てる内容の学習の機会を増やしてほしい。

○人格や意識は育った環境で形成される。幼い頃から家庭において、男女平等意識を育てていくことが大切である。

○学校教育を受けているうちは男女平等の意識があるが、社会に出るとギャップに気づいてしまう。

○家庭で不合理な実態を目にしている子どもたちは、正しい男女共同参画を意識していないだろう。そうなると、やはり学校で、教育の中で紹介してもらえるとありがたい。

（基本的な課題３）男女平等の視点に立った意識変革と制度・慣行の見直しのさらなる促進

○男性を対象とした講演、場が必要ではないか。男性にもっと理解してもらえるような施策をする必要がある。

○女性が異論をはさむと「女のくせにでしゃばったことを言って」という会話をよく聞く。

○祭礼の打合せに夫の代理で出席した時、「お前さんに代理が務まるかな？」と言われ、とても嫌な思いをした。

○最近では、祭礼で女性もおみこしを担いでいる姿が見られるようになった。伝統を守りながら男性と女性がともにかかわりお祝いをすることはいいと思って、いつも見ている。

○学校では、女の子が元気で男の子がいじけている。母親の「あなたは男だから、△△大学に行きなさい」という期待に押しつぶされているから。

○町内会、自治会の役員は男性の方が多いが、地域の子育て支援や、地域参加型の高齢者リハビリサークル等にはほとんど参加していない。

○小学校のPTA会長に初めて女性が就任した。地域もかわりつつあることを感じる。

○女性の「女だからいいのよ」という意識は変えていかなければいけない。

○女性が虐げられてきた歴史から見ると、「女性が強くなった」が強調されるが、「女性対男性」から「個の選択」に落ち着いてくるのではないか。

○テレビの CM で、家事は女性がやるものというイメージが強いものがある。

○若い人達の理解を得られるように、広報を活用して、啓発活動を更に推進してほしい。年寄りの気持ちを変えるのは難しいが、理解をさせるしかない。

目標２　みんなが政策・方針決定の場に参画できる機会を持てる社会を目指します

（基本的な課題１）政策・方針決定過程における女性の参画促進

○教員だったが、夫が管理職になったとき、暗黙の了解で自分は退職せざるを得なかった。

○市町村職員の管理職登用についても同じことが言える。

○供託金や活動の制限など、今の選挙制度は女性が出づらい。誰でもいいわけではないが、皆の要求を議会に伝えられる人を出したい。

○千葉県は農産物の生産高が全国第２位だが、農業現場はとても閉鎖的。農業委員に女性が入ってこないと変わらない。政策方針として女性委員を登用してほしい。

○各地で女性委員会主催のフォーラム等に男性の参加が多く見られるようになった。わずかではあるが男女共同参画が進みつつある。女性・男性を問わず役員を登用できる環境づくりを推進してほしい。

○町会の慶弔規程にあった「世帯主」について、変化が見られる。役員に何回か女性が就任することにより男女の「気づき」が生じている。意思決定の場へ複数の女性の参画が必要。

○職場においても女性も大いに勉強し、管理職として力を発揮していかなければならない。そのためのシステムづくりが大切。

○女性に対するスキル学習（能力向上のための学習）が少ない。モデルも少ない。女性の能力活用を図る時代であり、男女共同参画社会の実現のため、あらゆる分野で具体策を示さなければならない。

○審議会委員になりたいが、女性の登用がない。

○会議の場で意見を出したが、男性委員らに聞き入れてもらえず、悔しい思いをした。男性と同じ土俵に立たせてほしい。

○審議会等委員の女性登用が進んでいないので、数値目標を設定し積極的に取り組んでいただきたい。

○農業協同組合の役員が組合長をはじめ理事のほとんどが男性という現状を見ると、農業経営の実情を把握している女性を役員に登用するシステムが必要である。

○企業経営者は積極的に女性の能力を生かすことが事業活動にとってプラスになるという視点から、県は事業者に対し、女性を役員に就任させるなどして経営参画を推進させる施策が必要である。

○わたしたち男性の育児休業取得をより現実的なものにしてほしい。

○職場や政治の中の役職には、男性ばかりではなく、女性も同程度の人数を採用してほしい。県庁の中からもどんどん変えていくべき。

目標３　みんなが家庭・地域・職場において持てる能力を発揮し、人間らしく調和のある生活ができる社会を目指します

（基本的な課題１）労働の場における男女平等の促進

○娘が理系学生で、研究職に就きたいと言っているが、女性は辞めるという先入観からか、女性の採用枠が少ない。顧客は男女両方なのだから、両方の目が必要だと思う。

○給料の男女格差はある。最初は同期の男性より自分の方が給料が高かったが、抜かれた。何でも「長」がつかないとダメだ。

○一般職・総合職のシステムがある以上、総合職で入らなければ管理職登用は無理。一般職、総合職を何度か相互に移動できるシステムを取るなどしないと、女性管理職は増やせない。

○女性総合職は先輩もいないし、男性上司も女性の教育の仕方が分からないので、結果としてキャリア学習がなされていない。スタートの位置が違いすぎる。

○自分の職場では男性上司の音頭でお茶くみが廃止された。きっかけや問題意識で変わる。

○看護師や保育士になる男性が増えてきた。男性の進出は良いと思う。女性の車掌、バス運転手などもいる。

○コックをしている。以前は、体力面をどうクリアするかと考えていたが、今では「女だからできないとかではなく、自分のやっていることをどうお客さんに伝えられるだろう」と考えるようになった。

○食品関係は女性の登用が進んでおり、パート店長なども出てきているが、女性を安価な労働力としている。年金、雇用保険など社会保険に入っていない人は労働組合にも入らない。契約時に130万円以上働くか否か明確にさせられる。

○仕事内容がほとんど同じである場合でも、パートと正社員の給料にはかなり差があり、パートはパートとしてしか評価されない。一方で、正社員は長時間労働など過酷な働き方を強いられている。雇用形態の違いにかかわらず個人の能力が発揮でき、生きがいを持って仕事ができるような社会になるとよい。

○印刷業の女性が制度融資を申し込んだが、実績を見てもらえず、借りられなかった。

○中小自営業者、家族従業者は、街の守り手、地域社会の担い手であるが、地域経済の長引く不況のもとで、本当に大変である。状況をもっと正確に知ってもらい、その上で何ができるのかを考えてほしい。

○家族従業者の働き分が正当に評価されていない。

○地域には、まだ男性の力が強い。農業においても、男性は主に機械仕事、女性はその他の農作業のほかに家事もある。

○農村女性の起業家は、実践が認められて元気である。

○漁業では浜は女で、海は男だが、水揚高の確認などは一緒にやるし、資金繰りや経理なども大体陸にいる女性の仕事となる。こういう日常生活が、男女共同参画だと思う。

○海苔作りは共同作業なので、片方が欠けると休業せざるを得ない。

○男女雇用機会均等法が改正され、女性でも三交代勤務、夜勤をするようになった。職場では、母性保護が薄れている。

○まだ母乳をあげられる時期に仕事に復帰すると、搾乳の時間も取れない。搾乳の時間を取ると、冷たい目で見られる。

○男性でもフリーターが増えており、女性は出産等があるため、余計正社員として就職できない。男性も含め、正社員として働けるような社会にしてほしい。

○男女雇用機会均等法も出来ているが、「平等」が保護の取り上げにならないように。未だに共働き女性の負担は大きく、生理的にも保護が必要な分がある。生理的な違いによる差別は完全になくすように。特に労働市場における賃金等、身分差の差別は完全になくすこと。

（基本的な課題２）ライフステージに応じた仕事と生活の調和の促進

○子育てで、夫婦二人だけでは無理ということはいっぱいある。

○不安な要素がたくさんあり、子どもとの向き合い方について、毎日考えさせられている。子どもを育てやすい環境を地域が支援したり、親の悩みを親身に聞いてアドバイスをしてくれる場所を何か所か設けたりしてほしい。

○地域ごとに、経験豊かなシニア世代が子どもや子育て中の親と交流し、支援できるとよい。

○学童保育は、少人数でも各地区でやってもらうのがベスト。雇用も増える。

○新興住宅地という地域性から、ローン・教育費などで共働きが多いため、保育所などの子育て支援を必要とするが、待機児童が多い。

○保育所は夜7時まで預けられるが、学童保育は6時までで、暗い道を一人で帰宅しなければならない。また、親が運営するのでかかわりが多く、負担を感じる。

○再就職したくても、夏休みなど学校が長期休暇の時、預け先が見つからない。

○子どもが保育所や幼稚園に入ればつながりもできるが、その前の段階では二人きりになってしまい、ストレスがたまる。週一度でも、子育てサークルのような機会がほしい。

○近隣に産婦人科、小児科の医師が少ない。子どもを産み育てるための環境を整えてほしい。

○過去、男女平等を唱えていたときは、ゆとりある豊かな社会が理想だったかもしれないが、現実には厳しい状況であり、今の若い人たちが失っているものは多いのではないか。仕事も家事も子育ても、ゆとりを持ってできるような社会を目指すことが必要。

○少子化対策として、夜間保育、病児保育という施策が進められているが、却って女性の働き方を厳しくしているのではないか。諸外国のように短時間勤務等、多様な働き方を普及させるなど、社会システムの根幹を変えていかないといけない。

○会社で派遣社員を雇う際、優先的に子どものいる人を雇おうということになった。自分も保育所参観などのためによく休ませてもらっている。理解のある会社が増えてきている。

○企業によっては、男女共同参画の実践が進んでいる。それぞれの企業が意識を変え、風土改革を行う必要があるのではないか。自治体はそれを支援してほしい。

○企業の次世代育成支援の取組を促進してほしい。300人以下の事業所は行動計画の策定が義務付けられていないが、策定するよう呼びかけてほしい。

○以前は「男は仕事、女は家庭」が当たり前だったが、家庭の中でそれぞれが立場に応じてできることはやる、というふうになっている。能力を発揮する上で、性別による固定観念は捨てていかないと。

○家庭の中で男女が協力し合うことが大事。男性の働く時間が長すぎる。

○育児休業を取った男性が、こんなにいい時間を女性だけに独占させるのはもったいないと言っている。男性も子育てを経験するのはとてもいいことだと思う。

○男性は育児休業が取りにくい。代替要員はお金がかかるし、休むのは悪いと思ってしまう。環境が整っていればいいが、現況では、周りに負担をかける。

○出産で退職し、育児の次は親の介護があり、扶養の範囲内で働くなど、働き方を選べない。保育料も高いので家庭にいる方が得。

○子どもが落ち着いて、さぁというとき、年齢の壁にぶつかる。パソコンを使えるのは若い人だと判断されてしまうが、一人ひとりの能力や良さを見るなど、多面的な見方をしてもらいたい。

○子どもを産んで専業主婦として生きるか、働くかということについて自分の選択を語るときに、 どうしても他の選択を否定するような言い方になりがちなのは、自分の選択に納得しきれていない、あるいは周りから認められていないと感じているからではないか。

○保育園の充実・病気の子どもの受け入れ先整備、病院の休日診療は大きなことだと思う。

○ まずは、家庭での「役割分担」の考え方からではないか。男女に関係なく、「手のあいた人が取りかかること」。これが職場環境にも、社会全体にもつながると思う。

（基本的な課題３）男女がともに担う地域づくりの促進

○退職後、うまく社会に参加できない男性のサポート体制が取れたらいいと思う。

○40年近いサラリーマン生活では、職場と家庭の往復のみだった。男性は女性に比べて明らかに社会参加が少ない。人生80年時代に、老後を孤独に過ごすことのないよう、行政・企業・団体が連携して働く男性のボランティア活動を推進するなど、サラリーマン男性

の地域社会への参加を積極的に進めるべき。

○退職した人が出られる催しが少ない。男性が興味や関心を持てるような講座が少ないのではないか。

○全ての人々にとって住みやすいまちづくりのためにも、地域住民と各自治体とのコミュニケーションを活発に行うべきだ。

○地域に住む全ての人々が共同して住みやすい地域づくりをする必要があるのではないか。

○地域社会の関係が希薄になってきたが、いざという時は隣近所が頼りになる。災害時における地域の組織的支援の必要性を強く感じている。

○地域社会の行事や会合では、男性が主導権を握り、女性が下働きをすることが多い。

○今まで、農村の地域づくりは、男性の手で、機械化によって生産性を上げることだけを目的として行われてきた。地域おこしのためには、農村女性が培ってきた暮らしの技術や感性を生かさなければいけない時期にきていると思う。女性が動き出している。

○農村は変わってきている。人とのつながりを大切にしながら、男も女も、住みよい地域をつくりあげていく必要がある。

（基本的な課題４）地球市民として国際社会と協働できるまちづくりの促進

○県内在住外国人が真に求めているのは何かを根底から考え、快適な生活を送ることができるようサポートするための講座の充実や情報を提供してほしい。

○国際社会に対応できる人材育成と研修の実施。

○在住外国人の方と、地域住民との交流事業の実施。

○最初は生活に関する情報が入らない。誰でも最初に外国人登録をしに行くのでそこで情報をくれればいい。

○外国人お断りのアパートがある。外国人はペットと同じ扱いだ。

○子どもがハーフだということでいじめられる。

○保育園で「こどもの言葉づかいが悪い。ほかの子どもに悪影響を与える。」と言われた。

目標4　みんなが生涯を通じて健康でいきいきと暮らせる社会を目指します

（基本的な課題１）生涯を通じたからだと心と社会的な健康づくりの促進

○女性は、更年期の辛さを我慢してしまうことが多い。「誰でも通る道だ」と周囲に言われ、自分でもそう思ってしまう。特に医師からそう言われてしまうと、もう自分ではどうしようもなくて、病院を渡り歩く「ドクターショッピング」になってしまう。

○男性もストレスや人間関係が引き金で不妊や、EDに悩む人がいる。自殺者も圧倒的に男性が多い。男性の更年期にも着目した医療が必要。

○ピア・エデュケーター（*76 ﾍﾟｰｼﾞ参照）活動を通じて、男性はもちろん、女性自身にも、女性の身体に対する知識不足を感じる。特に女性は、自分の身体であるはずなのに、男性に主導権を委ねてしまっている。

○未来を担う子どもたちに豊かな性を伝えたいが、家庭の中では教えられないのが現状。家庭、地域、教育現場でのトータルな方針が必要なのに、どう伝えるかの方針が決まらない。

○「性」と「生」は、本来家庭で伝えられることなのに、今の家庭ではそれができない。悪い連鎖になっている。誰がその部分をサポートするかといえば、まずは教育機関になるが、全ての学校で、指導要領に沿った性教育がなされているわけではなく、学校により格差が生じている。

○性教育については、誤解を解きながら、もっと認識を深めていく必要がある。男性を中心とした社会のあり方が変わっていくべきだと思う。

○子どもを教える側の理解度が低すぎる。性教育の講義に参加する、意識の高い保護者でも「性教育はセックスのことだと思っていた」という人が多い。大人への性教育が大事。

○現在の日本では、まだまだ夫婦が揃っていないと子どもが産めない。シングルマザーへの差別も多い。意識改革が必要。

○性教育は、人権教育に繋がる、特に重要な教育だと思う。一度だけではなく、継続的に実施してほしい。

（基本的な課題２）高齢者・障害者の生活の充実

○福祉の充実が基礎及び前提になければ、「男女共同参画」の成果は、結局「効率」中心に終わるおそれがある。

○地域福祉権利擁護事業の中で、高齢者、男女に向けての福祉活動や成年後見制度等、様々なサービスを末端に下ろして行けるような計画があれば良い。

○５人に１人の高齢者がいる社会で、お互い楽しく共存できるような男女共同参画社会づくりの計画を立ててほしい。

○男女国民の全てが一般検診に参加するよう指導する。健康保険、国民年金への確実加入の徹底指導を。

○高齢者福祉に関しては、男女共同参画社会づくりがされてきているようだが、介護の面、特に家庭の中では女性の負担が多いようだ。それは致し方のないことなのだろうか。

○これからの高齢社会において、介護の面でも、男女平等に負担をしていく、女性だけが介護の負担を負わない社会にしてほしい。

○高齢者や障害者が、お金をかけなくても気軽に外出を楽しめる環境整備が大事。高齢者や障害者がたくさん街中にいれば、地域にとっても子どもにとっても安全な社会になるのではないか。

○団塊の世代が定年を迎え、中高年の男性が家庭に入ると男女平等の均衡が崩れてくると思う。男性の心とからだのケアが必要になってくる。中高年の男性が活躍できる場が必要。

○同居している40歳代の息子から暴力を受けた母親が、自分の持ち家から逃げ出して、住む部屋を探したが、借りられないという相談を受けたことがある。現実問題として、高齢者や障害者、特に女性は、非常に家が借りにくい状況にある。

○介護保険が導入されて、女性が助かったかと思ったら、全然助かっていない。介護は女性が担うのが当然だという考えが根強く残っている。介護保険がこれだけ普及しても、介護の形が女性のために改革されていない。男性が自分も参画するという意識になってくるか、悲観的な見方をせざるを得ない。夫は妻の車椅子を押さないが、夫の車椅子は妻が押すという実態はおかしい。

○介護保険の見直しで、在宅介護の現実が女性の肩に大きくのしかかってきた。これまで、介護は女性の仕事として当たり前とされてきた。夫は高齢になればひたすら妻の介護を求め、親は息子より嫁に依存し、舅や姑は長男の嫁に犠牲を強いる。この構図をきちんと見直さなければならない。介護について思いもよらない考えの男性がまだ大勢いる。今後ますます高齢化社会になっていくことを考えると、在宅介護こそ男女共同参画でなければならない。福祉の推進においては、男女ともに平等の力を出し合い、ともにかかわりあっていくことが大切である。

第３章　計画の推進

○千葉県は全国で唯一条例のない県である。条例を制定し、具体的に動いてほしい。

○男女共同参画社会づくりの真の目的を周知させるために、あらゆる角度からの検討をした後、男女共同参画条例を制定してはどうか。

○苦情処理委員会をぜひつくってほしい。

○地域集会はとても良いことなので、今回を契機に、県は県民の声を聴いていろいろな事業を行うようにすると良い。

○市町村との連携を図るためには、施設は中央に集中しておりなかなか使用できない。地方にも設置を望む。

○地域で推進しても、県と関係組織との調整がとれなければ推進しない。

○男女共同参画を推進するため、他地域では部長級の二次評価や外部評価を行っているところがある。

○子育て支援などについて、千葉県では地域格差が大きい。

○市町村によって男女共同参画の推進状況に格差があるため、足並みが揃うようにしてほしい。